



Title	現代チリにおける「邪視」習俗に関する証言：ニンウェ区(1)：エラスモ・ラミレス氏の事例
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 2002, 26, p. 205-221
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93856
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代チリにおける「邪視」習俗に関する証言：ニンウェ区（1）

—エラスモ・ラミレス氏の事例—

Testimonio sobre “el mal de ojo” en Chile contemporáneo: Comuna de Ninhue (1)
— caso de don Erasmo Ramírez —

千 葉 泉

1. 序

本稿は、現代のチリにおける「邪視 mal de ojo」の具体事例に関する証言である。

チリは、複雑に人種の混交したラテンアメリカの中でヨーロッパ系住民の比重が相対的に大きく⁽¹⁾、近年比較的順調に経済発展を続けたこともあって、ラテンアメリカの中では近代化が進み、「合理的発想」が社会に広く浸透した国というイメージを持たれている。

だが研究の過程で親交を持つようになった様々な社会層や民族集団の人々の口から、「邪視」や「邪術」にまつわる直接体験に関する数多くの証言を聞くにつれ、こうしたイメージがかなり表面的なものであることに気付かされた。

これらの人々の中には、都市から遠隔の農村地域の共同体に住む先住民もいれば、典型的なスペイン系白人小農民もいる。また、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、近代化を推進する人的要素として当時の政府が奨励したヨーロッパ移民の系譜をひき、地元で屈指の裕福者となっているイタリア系の二世や三世、そして今世紀中葉に米国から移住したカトリックの神父もいる。

「邪視」とは、ある人物が視線を通じて他者（人、動物、事物など）に邪悪な作用（病気、死など）を及ぼすという原理である。⁽²⁾邪視にまつわる習俗は、すでにエジプト、ギリシャ、ローマといった旧大陸各地の古代文明の時代から記録され、中世のキリスト教世界にも継承されたのち、衰微しつつも世界各地で現代まで伝わっている。⁽³⁾また新大陸にも、おそらく15世紀末以降ヨーロッパ人の手で伝えられ、今日でも広い地域に分布している。

現代のチリ⁽⁴⁾に限っても邪視の信仰や実践に関わる具体的実態は地域に

よって多様だが、ほぼ共通する特徴は次のようなものである。すなわち、「重い血 *sangre pesada*」を持った人物が、抵抗力の弱い赤ん坊や幼い子供などを凝視したり、これを褒めちぎったりすると「邪視」にかかる。邪視にかかったものは高熱や吐き気、頭痛、片方の眼が小さくなるなどの症状を示し、ひどい場合には死に至る。邪視にかかった子供は、病院に行っても原因が特定できず、近代的な化学薬品を投与しても治らない。そこで登場するのが「サンティグアドーラ *santiguadora*」⁽⁵⁾と呼ばれる治療師である。彼らは十字を切ったり、キリスト教系の祈りや独特の祈祷を唱えたりして、邪視にかかった赤ん坊や子供を治す。

このように「邪視」は、合理的な説明のつかない原因に起因し、「信仰」という、やはり合理性を超えたものによって解消される、つまり、合理性の枠外で機能すると認識される習俗であるといえる。

もちろん全てのチリ人が邪視の習俗を共有しているわけではなく、これを「迷信」として一笑に付す者もいる。特に、近代医療に関する専門教育を受け病院に勤める医師や看護師の中には、こうした習俗を真っ向から否定するものが少なくない。

だがそれでも、この習俗が現代チリのかなり広範な地域、社会層、民族集団の間で存続しているのは確かである。換言すれば、「ある種の害悪が合理性を超絶した原因によって発生しうる」、そして「その害悪に対して近代医療が効果を発揮できず、やはり合理性を超えたある力によってのみ対処が可能である」という考え方がチリ社会の広い層に分布しているといえる。

2. 本証言の意義

本稿で扱うラミレスさんの住むニンウェ区は、チリ中南部第8地域ニューブレ州に属する人口約六千人⁽⁶⁾ほどの小さな農村である。

土壌の劣化や灌漑設備の不足、貧困、過疎などの問題を抱えるニンウェ区では、平成12年度より、JAICAによって農学専門家が派遣され、現地の専門家の協力を得て農村振興プロジェクト(CADEPA)が実施されている。⁽⁷⁾チリは、一人当たりの国民所得が比較的高く、日本政府の基準では「中進国」に分類されている。それゆえ、ニンウェで実施されているのは、貧困国に対して行われているようなインフラ整備型の援助ではなく、現地住民にコストを負担させる条件で、生活向上に役立つ技術を移転するという方式の

プロジェクトである。そしてそのためには、現地住民の積極的な参加や組織化をいかに実現するかが重要となる。

筆者は、農村環境整備センターの基礎調査委員として、一作年の7月末から8月初旬にかけてニンウェ村を訪れ、社会学および文化人類学の観点からの現地調査を行った。(8)

それまで数年にわたり、筆者は、第9地域に点在する複数の先住民マプーチェの共同体を訪れ、マプーチェの文化、その中でも特に先住民の伝統的な世界観を色濃く残すシャーマニズムに関するフィールド調査研究を行ってきた。(9)

それに対し、ニンウェ区が属する第8地域の平原部は、古く植民地時代よりチリ植民地南方の実質的なフロンティアとして、キリスト教を始めとするヨーロッパ的な伝統が根付いた地域である。したがって、過去において先住民からの影響を様々な形で受容したことはあったにせよ、少なくとも今日、先住民の文化が直接大きな影響を及ぼすような地域ではない。

こうしたことから筆者は、この地域では先住民集落と比べ、シャーマニスティックな習俗はそれほど強く残ってはいないだろうと想像していた。だがこうした想像は、ニンウェ村滞在初日にしてもろくも崩れ去った。

村に滞在する際、JAICA専門家の紹介で、区の中心集落に位置する「エル・ネグロ・ブエノ」という名のレストランに居候することになった。このレストランを経営するP一族の女主人Mさんは、村の零細農家の出身だが、かつて首都サンティアゴに移住した経験を持っていた。そして、帰村後、レストランや映画館で働いた経験を通じて修得した経理や経営のノウハウを活用し、区の集落部にレストランを購入した。さらに、レストランの経営で生み出した資金で、80haの農地を購入する。こうして、自家灌漑を導入してブドウを始めとする換金作物を植える一方、自家製のワインをレストランで出すなど、多角的な経営を行っている。

つまりMさんは、貧困と過疎に悩む村の中では、かなり進取の経営精神に富み、合理的な発想に秀でたタイプの人物ということができる。

ところがレストラン宿泊初日の夜、筆者はその女主人が有能な「邪視治療師」でもあることを知り、新鮮な驚きに打たれた。

Mさんは、邪視以外にも、レストランの経営が軌道に乗ってから、近隣の、別のレストラン所有者の家族から二度にわたって受けたという「邪術」の経験についても筆者に語ってくれた。

つまり、区内の集落部に住み、企業家的・合理的精神を強く保持していると思われる住民の認識の中でも、邪視や邪術は決して過去の神話や絵空事などではなく、極めて現実的な問題として多大な影響を及ぼしているのである。

P一族以外にも、調査の過程で知り合った区内の様々な地区、階層の住民たちから、邪視や邪術にまつわる実体験を告げられた。当事者が死亡するに至ったケースについても、何名の村人から耳にした。

そして、邪視に関する多くの証言の中で、住民の認識上の特徴の一端を示唆している点で特に興味深かったのが、本稿で扱うエラスモ・ラミレス氏の証言である。

ラミレス氏は、区内のある大農園(フンド)に住み込んで働く小作農の家庭に生まれた。そして中学校を卒業後、近隣の米作地帯において臨時労働に数年間従事したのち、1987年から区役所の運転手に採用され、今日に至っている。

証言当時32歳であったラミレス氏は、4年ほど前に「邪視」にかかった3歳の娘を治療してもらった経験がある。この時に治療を担当したのは、上に述べたMさんの娘で、やはり邪視治療師として区内外の多くの子供たちを治療してきたM'さんである。

証言にもあるとおり、当初、ラミレスさんは既婚の友人などから邪視にまつわる体験を聞かされていたにも関わらず、これに懐疑的な立場を取っていた。

だが、我が子の不調と、それに対する現代医学の無効性という厳然たる事実を前に、邪視治療を受けることを促す母親の助言を不承不承受け容れる。こうして近所に住んでいた邪視治療師M'さんに頼ったところ、娘はたちどころに回復する。この実体験を機に、彼は認識を180度転換させ、現在では邪視の存在や邪視治療師の有効性を確信している。

本稿で邪視に関する具体的な証言を取り上げることには、いくつかの理由がある。

特定の地域の邪視習俗に関する具体的な情報を記録すること自体、民俗的史料を残すという意義はありうるであろう。

だがそうした学術的な目的以外に、例えばニンウェで行われているような地域振興プロジェクトのような実践的な目的にとっても、こうした習俗の認知が現地の人々の認識上の特徴を知るための一助となるであろう。

第一に、一般的な意味において、村人たちの認識上の特徴を示唆している。

すなわち、作物の栽培や養畜、商品化などにおいて何らかの困難が存在する場合、その原因を純粹に地学・農学的など合理的な要因を超えた何らかの力に帰するという認識の可能性を示している。例えばMさんは、邪視が原因で家畜が死亡したとする親族のケースや、邪術によって家畜保有数をコントロールされているという別の親族のケースについて語っている。少なくとも、こうした認識の特徴について考慮しておくことは無駄ではなからう。

第二に、ある処方に対する信頼観が形成される際の特徴という点について、示唆を与えてくれる。

この点でラミレス氏の認識変化のプロセスは示唆に富んでいる。彼自身は、娘の邪視治療の現場を自分の目で見ているわけではない。換言すれば、治療師がどういう「方法」で、あるいはいかなる「原理、理屈」のもとに、娘を治したかということは全く問題にしていけないのである。それに対し、彼が邪視習俗に関する確信の根拠として挙げているのは、「娘の病的状態が即座に解消した」という明示的な事実のみである。換言すれば、合理的な説明ができるか否かに関係なく、現実に存在する具体的な問題を解決したという事実ゆえに、彼にとって邪視習俗が強烈な実存感を持ってたち現れたのである。

このことをプロジェクトのケースに投影させると、例えば、農業生産の向上に関わる技術を移転しようとする際、その有効性を合理的に説明できるかどうかは必ずしも重要ではなく、それが問題解決のための有効性を具体的に明示できるかどうかに関心が注がれることを暗示している。その意味で、その技術に対する現地の人々の信頼を誘発するにはどのような手続きを踏むべきか、という点に関するヒントを与えてくれている。

単にモノを与えるトップ・ダウン型の援助ではなく、住民にもコストを負担してもらいながら、彼らの積極的な参加を喚起しつつ技術を導入するというボトム・アップ型の援助が国際的に主流となりつつある現在、このような現地住民の認識上の特徴を学ぶことは大切であろう。

なお、本稿の証言の内容に直接言及されているわけではないが、村に存在する既存の社会関係の特徴を知るという点でも、この種の習俗を把握しておくことは意義深い。

少なくとも今日のチリでは、通常、邪視をかける人物は無意識のうちにそうしてしまうのであり、意図的にそうするわけではないと考えられる。換言すれば、誰が邪視をかけてしまったかが判明した場合でも、その人物を非難したり、制裁しようという発想は存在しない。

一方、治療を受ける幼児の家族は、子供の命の恩人にも等しい治療師に対して強烈な感謝の情を抱く。本証言にも見られるように、治療師が実質的な謝礼を要求しないこともあって、そうした感謝の情はしばしば擬似的な洗礼親関係とでもいべき永続的な絆に転じる。また、邪視治療が契機となって、両者が実際に洗礼親関係を結ぶこともある。

この意味で、邪視習俗は村人同士の社会関係を補強するという方向で作用し、⁽¹⁰⁾治療師を中心としたインフォーマルな人間関係のネット・ワークが存在することを教えてくれる。住民の組織化が鍵となる参加型プロジェクトの推進にとって、現地に根付くこうした社会組織の実態を把握しておくことも決して無意味な作業ではなからう。

以上見たように、現地の人々の認識や社会組織の特徴の一端に触れるという意味を込めて、本稿では「邪視」に関する証言の一事例を紹介する。

3. エラスモ・ラミレス氏の証言 (Testimonio de don Erasmo Ramírez)

以下は、2000年7月27日に、筆者 ((C)) が ラミレス氏 ((R)) との間でスペイン語で行った対話の邦語訳、およびその原語版である。

(1) 邦語訳(Traducción en japonés)

< 1 > 「邪視」習俗に対する当初の不信

(C) はい。では、直接、それでは君が僕に語ってくれたトピック、とても興味があるんだけど、それはつまり・・・、いわゆる「邪視」っていうやつだね。ええと、最初、例えば、君は「邪視」っていう病気があるって信じていたのかい。

(R) いや。

(C) ああ。信じてなかったの。

(R) うん。

- (C) でも話に聞いたことは・・・。
- (R) もちろん。ああ。多くの人から聞いていたんだ、つまり同僚というか、自分より前に結婚した友人たちが、子供がこんなことになったとね。彼らの話では、子供が有名な「邪視」の病にかかるっていうのは本当だってことだった。
- (C) ああ。彼らは何と・・・、どういう事だって言っていたの。
- (R) つまり、子供が高熱に苦しんで、果てしなく泣きじゃくるっていう話だった。診療所に連れていくんだけど、結局医者には説明が出来なかったってね。決まったように解熱剤とかそんなものを処方するんだけど・・・、熱を下げる薬のはずなんだけど、決して下がらないし、泣くことをやめようとしないうって。それで・・・。
- で、こういう子供を「お祓い」してもらいに連れていくと、熱もおさまって、泣き止み、眠るんだと・・・。赤ん坊はその後、安らかに眠ることが出来るとね。リラックスして、言ってみれば、体がリラックスするんだと。
- (C) 彼らはそんな風に、つまり、言っていたと。
- (R) そう言っていたんだ。うん。
- (C) ああ、なるほど、なるほど。で、君はそうした意見、つまりそういう話といった方がいいかな、そう聞いてどんな風に思っていたの？
- (R) あんまり信じてなかったんだ、だって、自分自身がもっと直接的な形で経験したわけじゃなかったからな。どうせ、チリ人がお得意の、多くの絵空事の一つに過ぎないだろうって心の中で言っていたんだよ。

< 2 > 実体験による「邪視」習俗の確信

- (R) でも、自分自身の身に降りかかることになるともう、確かにそうなんだと確信するようになるってわけさ。
- (C) ああ、ほう、ほう。ええと、じゃあ、実際に体験したのは、それでは、その経験を個人的にね、いつだったの。
- (R) そう体験したのは・・・。僕には子供が三人いて、男の子が一人、長男だが、娘は今七歳なんだけど、三歳ちょっとくらいの時に・・・。
- (C) ということは、つまり約四年前ってことだね。
- (R) うん。あの娘が・・・、ある夜娘の様子に気づいて目を覚ますと、泣

いていてね、ほとんど焼けるような高熱だった。それで、ここの健康診療所へ連れてったのさ。で、医者はそのときどうしてやることもできなかつた。(その後)一番近い病院に連れて行ったんだ、キリウエにね。そこでも医者の診断ではただの熱ってことだった。でも、赤ん坊は相変わらず・・・、全く熱は下がらないし、泣き止みもしなかつたんだ、な？

それで、ここに着いたのはもう、朝の5時頃だったはずだと思うけど、お袋がね・・・。その頃はまだお袋と一緒に住んでいたんでね。で、僕らに言うには、そうに違いない、邪視だってね。でも、人は自分の目で見ないうちは、そんなに簡単に信じないものだろ。

(C) ああ、君のお母さんは、そういう事情に違いないって・・・。

(R) ああ。「いや。」ってね。こう言うんだ、「いや、いや」ってね、「この娘は邪視にかかっているに違いないよ。邪視にかかっているに違いない、な、お前や。意地なんか張らないで、この娘を邪視祓いしてもらいに連れて行きなさい。誓って言うけど、絶対に良くなるから。」ってね。

で、本当にそうだったんだ。僕らはあの人、マリアナがいる「エル・ネグロ・ブエノ」の近くに住んでいるんでね。それで、お隣さん同士っていうわけで、それにここの人たちはみんな親切なんだ、病気の子供がいるときなんか特にね。彼女のところへ連れてきたってわけさ。

で、女房のやつが赤ん坊を連れて入っていった。邪視祓いをしてもらったんだよ。そうしたら、家に着いてもものの三、四分すると、娘はもう熱が消えて泣き止んでいた、体がリラックスしてあとは寝るだけってな感じだったんだよ。

で、翌日目を覚ました時には熱もなく、もう・・・、どんな病状も何も消えてたんだ。だから、その段になると、確かに邪視っていうものが存在すると確信するものなんだよ。

(C) それじゃあ、熱は、というか、君はそこを触ってみて、それでわかって・・・。

(R) ああ、いやあ。焼けるくらい熱かったんだ、焼けるくらいね。

(C) ああ、焼けるようにね。

(R) 焼けるほどの熱ささ。焼けるほどのね。この上ないくらいの熱さ。それに、あの泣き様といたら・・・。決して子供は安らぐことがなく

て……。泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、泣くっていうわけさ。

- (C) ということは、事は、つまり明らかな事実ということだよな。
- (R) ああ。というか、僕の観点からすればそうということだよな。ああ。いやあ。「邪視」は確かに存在するし……。それに「邪視祓い師」も確かに存在するのさ。もしそうでなければ、治るはずないもんな。
- (C) なるほど。でも、片方の眼がどうにかなってなかった？ええと、何と言うか、小さくなるというか、つまり眼について変化があるって言われることがあるんだけど。
- (R) 僕は、子供が病気の時にじろじろ見る事ができない性質なんでね。でも、女房によると一方の眼がより小さくなるってことだった。つまり、片方の目が小さくなるよね。うん。で、まさにその事から判断して、お袋は「邪視」に違いないって言ったのさ。
- で、やってみたらほとんど……。[そうだったに違いない]なんてことじゃなくて、絶対にそうだったんだ。だって、即座に治ったんだからね。
- (C) ええ、はい、はい。でもどんな形で、何ていうか、具体的に言って、娘さんは治療されたの。ああ息子さんか、ごめん、息子さん、それとも娘さん？
- (R) 娘だよ。僕は娘と一緒に、邪視祓いする人と入ってはいなくて、僕は待っていたんだ。女房が娘と入ったんだよ。というわけなんで、彼女がどんなことをされたかっていうのは……。というか、やっぱり入ることを許されない……。
- (C) 君の奥さんもそう、っていうか。
- (R) 妻が入ることも許されないみたいで、彼らは赤ん坊と自分たちだけ一緒に入るみたいだ。
- (C) ということは、つまり具体的に話すことは出来ないってことだね。
- (R) その通り。そうさ。どんなことをされたのか、説明することはできないんだ。唯一わかってることは、ありがたい治療だったってことさ。
- (C) ああ、ああ、ええ、ええ。

< 3 > 象徴的な治療報酬

- (C) でも、例えば、邪視祓い師は、ええと、マリアーナさんだよな、つま

り……。でも、彼女は何かを要求するの、例えば、報酬とでもいうか、そういうものを治療の代償として。

- (R) ああ、いや。彼らは何も要求しない。でも、人が助言するのは、つまり、最も年長の人々、年輩者たちによれば、何でもいいから、とにかく支払わなければいけないってことさ。例えば百ペソでも五十ペソでもいいからね。でも、とにかく治療代を払わないといけない。
- (C) ああ、たとえ象徴的なものに過ぎなくてもだね、言ってみれば。
- (R) その通り。象徴的なものっていう方が強いね。でも、人が言うには治療効果があがるって話さ、もし……。象徴的にでも邪視治療師に何か支払った方がね。でも、彼らが自分の方から求めるわけじゃないんだ。
- (C) ああ、彼らは要求しないんだね。
- (R) ああ。でも、こちらの方から進んで支払うべきなんだ。
- (C) ああ、そう年長者たちが助言していると。
- (R) 助言してるんだ、その……。ああ。
- (C) で、君はこの場合、どうしたの。
- (R) ああ。払ったよ、百ペソか二百ペソか⁽¹¹⁾、単にちょっとポケットから取り出すっていう風にね。
- (C) ということは、ほんの……。
- (R) いいや。単に……。
- (C) 言ってみればほとんどタダみたいな……。
- (R) そう。「とにかく支払った」って言うためにそうするみたいなもんさ、その…、治療代をね……。全くタダだよ、だって……。
- (C) なるほど。ロウソクも求められなかったの。というのは、時に、つまりロウソクを所望する地域もあるって聞いたことがあるんだけど。
- (R) いや。僕が思い出す限りでは違うな。
- (C) やっぱりね。何も要求されないと、つまり。
- (R) ああ。

< 4 > 既婚男性の間での「邪視」認識の普及

- (C) その頃、君はもう働いていたの……。
- (R) 区役所でね。

- (C) 区役所の運転手としてね。
- (R) ああ。
- (C) でも、例えば、君は誰か他の人に、例えば、仕事場か、あるいは友人
なんかに君の経験を話した？
- (R) ああ、うん。時に集まるんだ。僕らはスポーツ・クラブをやっててね。
その辺で集まった時に、話し合ったりすることもあって……。で、
現在父親になってる連中のほとんどが、自分の子供が邪視になって、
邪視祓いに連れて行ったことがあるんだ。だから、父親である人で、
娘さんが邪視にかかったことはあるかと尋ねられる人を見つけること
は難しいことじゃないと思うよ。彼らが語ってくれるだろうよ……。
ほとんどの人が、思うんだけど、あなたにそうだとするだろうよ。娘
を邪視祓いに連れて行ったことがあるとね。
- (C) ああ、ああ、なるほど、なるほど。

(2) スペイン語版証言 (Version original en español)

< Al comienzo yo no creía en “el mal de ojo” >

- (C) Bueno, entonces, pasando directamente, entonces el tema que tú me con-
taste, que a mí me interesa profundamente, es el ..., lo que se llama “mal
de ojo”, digamos. A ver, al comienzo, por ejemplo, ¿tú creías que existía
una enfermedad que se llama “mal de ojo”?
- (R) No, pu.
- (C) Ya. ¿No creías?
- (R) No.
- (C) ¿Pero había escuchado de ...?
- (R) Claro. Sí. Había escuchado de mucha gente, u otros colegas, que ..., o
sea, unos amigos que se casaban antes, que a los niños les pasaba y ...
Ellos contaban de que era verdad que se les daba el famoso enfermedad
de “mal de ojo”.
- (C) Ya. ¿Qué decían ellos que ..., de qué se trataba?
- (R) De que se trataba que los niños sufrían fiebre alta y tomaban un llanto
que no terminaba nunca. Los llevaban a un consultorio, y resulta que los

médicos no tenían explicación. Les daban siempre espasmolíticos o alguna cosa ..., referente bajarle la fiebre, pero nunca le bajaban ni les quitaban el llanto. Así que ...

Y dice que después de llevarlos a persona a “santiguar” a estos niños, se acababa la fiebre, el llanto y dormían ... El bebé podía dormir tranquilo después, pu. Descansaba, como que el cuerpo descansaba.

(C) ¿Eso decían ellos, digamos?

(R) Eso decían. Sí.

(C) Ya, ya, ya. ¿Y qué pensabas tú de esas opiniones, digamos, de esas historias más bien dicho?

(R) No creía mucho, porque como yo no he vivido en forma de manera más directa. Uno dice que son una de las tantas cosas que inventa el chileno no más. El chileno es bueno para inventar cosas. Así que ...

< Ahora sé que existe “el mal de ojo” >

(R) Pero hasta que le toca a carne propia a uno, ya se tira a convencer de que la cosa es así, pu.

(C) Ya, ya, ya. A ver, entonces, ¿te tocó a vivir, entonces, esa experiencia personalmente cuándo?

(R) Yo tuve ... Tengo tres hijo, yo tengo un hombre, el mayor, mi hija que tiene en este momento siete años, cuando tenía alrededor de tres años y tanto ...

(C) O sea, ¿hace más o menos cuatro años, digamos?

(R) Sí. Ella ..., una noche despertamos con ella, y llorando, y con ..., casi ardiendo en fiebre. Y la trasladamos aquí a la posta de salud. Y el doctor no pudo hacer nada en ese momento. La llevamos al hospital mas cercano, que es Quirihue, donde también el doctor le diagnosticó solamente fiebre. Pero la guagua nunca dejó de ..., nunca le bajó la fiebre, ni nunca dejó de llorar. ¿Ya?

Y aquí llegando ya como a las cinco de la mañana yo creo que tuvo haber sido, mi mamá ... Vivíamos con mi mamá todavía. Y ella nos dijo que tenía que ser eso, el mal de ojo. Y uno no cree mucho mientras no

lo vea.

(C) Ah, ¿tu mamá te dijo que se trataría de ...?

(R) Sí. Me dijo “¡No!”. Ella me dijo, “¡No, no!”, dijo, “La niña tiene que estar ojada. Tiene que estar ojada, ya, hijo. No seas porfiado y llévenla no más a santiguar a la niña. Acuérdense de mí que se le va a pasar.”

Y fue así. Como nosotros vivimos cerca de “El Negro Bueno”, donde está esta niña, la Mariana. Y como somos vecinos, y siempre aquí la gente es bastante amable, sobre todo, cuando hay un niño enfermo. Se la trajimos a ella, pu.

Y entró mi senora con la guagua. La santiguó y resulta que los tres, cuatro minutos de llegar a la casa, la niña ya sin fiebre, sin llanto y como que si el cuerpo hubiera descansado a dormir no más.

Y el otro día despierta sin fiebre ya sin ..., sin ninguna enfermedad, nada. Y ahí uno se convence de que sí existe el mal de ojo.

(C) Entonces, la fiebre, o sea, ¿tú tocabai ahí, y se notaba que ...?

(R) ¡Ah, no! Quemante. Quemante.

(C) ¿Ah, quemante?

(R) Quemante la fiebre. Quemante. Cualquier fiebre. Y el llanto que no le ..., al niño no le deja ..., llora y llora y llora y llora y llora.

(C) O sea, la cosa, ¿verídica la cosa, entonces?

(R) Sí. O sea, de mi punto de vista sí, pu. Sí. No. Existe “el mal de ojo”, y ... Y existe “la santiguadora” también, pu. Si no fuera así, no se le quitaría.

(C) Claro. Pero ¿pasaba algo en uno de los ojos? Bueno, a veces dicen que como sé achica o no se, hay un cambio en cuanto a los ojos, digamos.

(R) Yo no soy muy amigo de mirar a un niño cuando está enfermo. Pero, según mi señora, decía que un ojito se le achicaba más. O sea, se le achicaba un ohito. Sí. Y producto de eso mismo era que mi mamá dijo que tenía que ser “el mal de ojo” no más.

Y resultó casi ... No que “tuvo que haber sido así”, sino fue así. Porque fue cura inmediata.

(C) Ya, ya, ya. ¿Pero, en qué forma, cómo se llama, concretamente hablando, se le trató a tu hija? ¿Ah, hijo, perdón, hijo o hija?

(R) Hija. Yo no entré con ella con la persona que santigua, sino que yo esperé.

Entró mi señora con ella. Así que de lo que ella le hizo ... O me parece que tampoco dejan que entre ...

(C) ¿Tu esposa tampoco, digamos?

(R) Parece tampoco dejan que entre alguna esposa, sino que ellos parece que entran con la guagua no más, y ...

(C) O sea, ¿concretamente no sabría decir, digamos?

(R) Exacto. Claro. No sabría explicarle qué le hicieron. Lo único que sé que fue santo remedio.

(C) Ya, ya, ya, ya.

< La “paga” es solamente simbólica >

(C) Pero, por ejemplo, la santiguadora, bueno, es señora Mariana, digamos ... ¿Pero, ella pide algo, por ejemplo, en cuanto al ..., recompensa, digamos, a su sanación?

(R) Ah. No. Ellos no piden. Pero sí se aconseja, según los ..., bueno, los más antiguos también, los mayores, de que uno tiene que dar lo que sea. Ya sea cien pesos, cincuenta pesos. Pero tiene que pagar el servicio.

(C) Ah. ¿Aunque sea simbólicamente, digamos?

(R) Exacto. Más simbólicamente. Pero dicen que es mejor la cura si se ..., si simbólicamente se le da algo a la santiguadora. Pero ellos no lo piden.

(C) ¿Ah, ellos no lo piden?

(R) No. Pero uno debe dárselo.

(C) Ah, eso aconsejan los ancianos?

(R) Aconsejan los ... Sí.

(C) ¿Y qué hiciste tú en este caso?

(R) Sí. Se le da cien pesos, doscientos pesos, como tomando del bolsillo no más.

(C) O sea, muy ...

(R) No. Una cosa ...

(C) ¿Casi nada, digamos?

(R) Claro, como decir que “se pagó los ..., el remedio.” Nada si no ...

(C) Ya. ¿Tampoco pidieron una velita? Porque a veces, me dijeron que en

algunas zonas piden velas, digamos.

- (R) No. De que me acuerde, no.
- (C) Tampoco. ¿Ninguna cosa, digamos?
- (R) No.

< **La mayoría de los papás creen en el “mal de ojo”** >

- (C) ¿En esa época ya tú trabajábai de ...?
- (R) En la municipalidad.
- (C) ¿De chofer de la municipalidad?
- (R) Sí.
- (C) ¿Pero, por ejemplo, tú contaste a alguna otra persona, por ejemplo, de la oficina, o amigo, tu experiencia?
- (R) Ah sí. De repente nos juntamos. Nosotros tenemos un club deportivo. Cuando nos juntamos por ahí, de repente conversamos de que ... Y resulta de que la mayoría de los que son padres estos momentos dicen que han tenido a su hijo ojado y las han llevado a santiguar. Así que no creo que sea muy difícil encontrar a alguien que sea padre, preguntarle si alguna vez su hija tuvo mal de ojo. Ellos le van a contarle ... Yo creo que la mayoría de la gente que ..., va a decirle que sí. Y las ha llevado a santiguar.
- (C) Ya, ya, ya, ya.

4. 注

- (1) 1992年の国勢調査によれば、14才以上のチリ人のうち、自らを先住民集団に帰属すると認識するものの割合は、総人口の10.33%である。
(*Los mapuches: comunidades y localidades en Chile* (1997年)、p.11.) また、黒人系住民はほぼ皆無に等しい。
- (2) 医療人類学研究会(編)、『文化現象としての医療』、162頁。
- (3) 古代から19世紀までの各地における邪視信仰の変遷については、エルワージ(1992年)、14-54頁参照。現代のイタリアの邪視習俗については、井本(1999年)、現代スペインの邪視については、Gómez(1992年)

参照。

- (4) チリの邪視民俗については、O. Plath(1981年)、pp.31-35.参照。また、第8地域の現代の邪視治療師の実態については、Parker(1992年)、pp.57-62.参照。
- (5) 邪視治療師の大半が女性であるため、一般名称としては普通「サンティグアドーラ *santiguadora*」という女性名詞形が用いられる。これに対し、特に男性の邪視治療師を指す場合には、「サンティグアドール *santiguador*」という。
- (6) *Municipalidad de Ninhue*(1999年)、p.3.
- (7) 『チリ住民参加型農村環境保全計画短期調査員報告書』(平成11年度)参照。
- (8) 平成12年度海外村づくり基礎調査事業、『平成12年度ポリビア・チリ農業・農村社会構造基礎調査報告書』(2002年予定)、第5章参照。
- (9) 第8地域に南接する第9地域の共同体に居住する先住民シャーマンの証言の記録としては、千葉(1999年)(a)、(b)、および千葉(2000年)(c)を参照。また、先住民シャーマンによる邪術治療を受けた白人系住民の証言としては、千葉(2000年)(d)を参照。
- (10) 邪術の場合は、かけたものとかけられたものという当事者同士の関係を直接的な形で阻害するという意味において、邪視習俗とは別の方向で作用するといえる。
- (11) 2000年当時の100ペソは、日本円にして今日の約20円にあたる。

5. 参考資料

(1) 音声資料

Parra, Mónica, *Testimonio*, Ninhue, 25 De julio de 2000.

Ramírez, Erasmo, *Testimonio*, Ninhue, 27 de julio de 2000.

(2) 文献資料

井本恭子、「サルデーニャの村落と *ocru malu*—ひとつの人類学的解釈—」、

『大阪外国語大学論集』第21号所載、1999年、155-174頁。

医療人類学研究会(編)、『文化現象としての医療』、メディカ出版、1996年。

Gómez García, Pedro (ed.), *El curanderismo entre nosotros*, Granada, Universidad de Granada, 1997.

千葉泉(a)、「「マチ」の証言：ルマコ区(1)―エウダリア・ライマンの場合―」、『大阪外国語大学論集』第19号所載、1999年、233-259頁。

千葉泉(b)、「「マチ」の証言：ルマコ区(1)―エウダリア・ライマンの場合―〈2〉」、*Estudios Hispánicos*, No.23所載、大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室、1999年、95-112頁。

千葉泉(c)、「「マチ」の証言：トライゲン区(1)―メレヒルダ・ウエンテラオの場合―」、『大阪外国語大学論集』第24号所載、2000年、1-26頁

千葉泉(d)、「チリ南部の民間医療に見る異文化接触―ある白人系患者の証言(1)―」、*Estudios Hispánicos*, 25号所載、大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室、2000年、139-154頁。

『チリ住民参加型農村環境保全計画短期調査員報告書』、国際協力事業団、平成11年。

エルワージ、F. T. (奥西訳)、『邪視』、リプロポート、1992年。

Los mapuches: comunidades y localidades en Chile, Ediciones SUR, Santiago, 1997.

平成12年度海外村づくり基礎調査事業、『平成12年度ボリビア・チリ農業・農村社会構造基礎調査報告書』、農村環境整備センター、2002年刊行予定。

Parker G., Cristián, *Animitas, machis y santiguadoras en Chile*, Rehue, Santiago, 1992.

Plath, Oreste, *Folklore Médico Chileno*, Editorial Nascimento, Santiago, 1981.

Municipalidad de Ninhue, *PLAN ANNUAL DE DESARROLLO ADUCATIVO MUNICIPAL DE LA COMUNA DE NINHUE (PADEM), Año 2000*, Departamento de administración de Educación Municipal (DAEM), 1999.